



筑紫女学園大学リポジット

Animal Keeping at Nurseries in the Urban Area of Fukuoka Prefecture

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 浩, 末吉, 久美, SASAKI, Hiroshi, SUEYOSHI, Kumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/314

福岡県都市部の保育園における動物の飼育状況について

佐々木 浩・末吉久美

Animal Keeping at Nurseries in the Urban Area of Fukuoka Prefecture

Hiroshi SASAKI and Kumi SUEYOSHI

1) はじめに

動物の飼育については、1956年制定の幼稚園教育要領の六領域「自然」の中で、「望ましい経験」として「動物や植物の世話をする」「飼育している金魚・小鳥・こん虫・にわとり・うさぎなどを見て話す」などが上げられている。1964年の改訂においても、「自然」の「内容」の中に「動植物を飼育栽培することを喜ぶ」ことが上げられている。1989年に改訂された幼稚園教育要領の五領域「環境」では、子どもを指導する事項である「内容」の中に、「身近な動植物に親しみをもって接し、いたわったり大切にしたりする。」と記載され、留意事項では、身近な動植物とのかかわりの中から、「それらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にすること」を養う事の大事さが明記されている。1998年の改訂においては、「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」とされ、留意事項も改定前と同様の記載がある。保育所保育指針では、教育に関わる部分については、基本的に幼稚園教育要領に準拠する形で改訂が行われており、1965年制定の保育所保育指針の「望ましいおもな活動」では、5歳児の「自然」で「身近な動植物に興味をもち、その世話をする。」、6歳児では、「身近な動植物をいたわったり、たいせつにしたり、世話をしたりする。」が上げられている。1990年、1999年改訂の保育所保育指針では、4歳児以上について、「環境」の内容や配慮事項の一番目に、動植物の世話が上げられている。2008年改訂の幼稚園教育要領、保育所保育指針では、五領域については、ほとんど内容が統一されており、1998年改訂の幼稚園教育要領の内容を踏襲している。このように、幼稚園、保育園にける動植物の飼育栽培は一貫して重要視されている。さらに、小学校教育での動物飼育の重要性は、鳩貝・中川2003において、生命尊重との結びつきを明確にしてまとめられて

いる。

幼稚園における動物飼育については、多くの研究がなされて来ている（谷田創・木場有紀（編）2004、全国学校飼育動物研究会（編著）2006）。保育園では病気に対する抵抗力が弱い未満児を預かっているため、子どもの健康最優先して、動物の飼育について躊躇する傾向があるように思われる。また、休園時の世話の問題等から、動物の飼育は避けられるようになって来ている（谷田他2001）。また、都市部の保育園では、自然環境の悪化から、保育に自然との触れ合いを取り入れる事が次第に困難になって来ており、動物飼育、植物栽培による自然との触れ合いは重要性を増して来ていると言える。このような状況の中で、研究があまり行われていない保育園での動物飼育の現状を把握するために、福岡県福岡市博多区の私立保育園における動物の飼育状況について、アンケート調査を実施し、問題点の検討を行った。

2) アンケート調査の実施方法

2007年7月から8月にかけて、福岡県福岡市博多区の22私立保育園を対象に、アンケート調査を実施した。質問項目は、2006年4月から2007年3月の間に飼育していた動物の種類、飼育数、飼育開始状況、飼育終了状況、飼育場所、世話担当者、飼育の問題点である。また、保育園の環境の指標とするため、定員、敷地面積、園庭の面積、延べ床面積についても2009年9月にアンケート調査を行った。

3) アンケート調査結果

動物飼育についてのアンケートの回収率は、86%（19園／22園）であった。また、保育園の環境についてのアンケートは、動物飼育のアンケートに答えていただいた19園について行い、回収率は84%（16園／19園。回答が不完全なものは無回答とした。）であった。

表1に飼育されている動物の種類を示した。

表1. 福岡市博多区の私立保育園で飼育されている動物（2006年4月から2007年3月）

	飼育動物	園数	飼育数	飼育タイプ	飼育開始状況	繁殖	飼育場所	飼育担当者
哺乳類	ウサギ	3	2~4	継続	保護者から寄贈	無	園庭、保育室、テラス	保育士、園児
鳥類	ニワトリ、チャボ、ウコッケイ	3	2~4	継続	保護者から寄贈	有、無	園庭	副園長、保育士、園児
	セキセイインコ、インコ	2	19	継続	購入	有	園庭、廊下	保育士
	アヒル	1	2	継続		無	園庭	保育士、園児
	クジャク	1	2	継続	購入	無	園庭	保育士
	ツバメ	2	5~6	一時的		有	園舎の壁	
爬虫類	ミシシippアカミミガメ、カメ	6	1~3	継続	保護者から寄贈、保護、購入	無	保育室、廊下、園庭	保育士、園児
	クサガメ	1	1	継続	捕獲		園の土間	保育士
両生類	メキシコサラマンダー	1	2	継続	購入	無		園長
魚類	メダカ	6	3~20	継続	保護者より寄贈、購入	有、無	保育室、園庭の池	園長、保育士、園児
	熱帯魚	5	14~40	継続	購入	無	廊下、保育室	園長、保育士、園児、業者
	金魚	4	2~沢山	継続	職員、保護者から寄贈	無	廊下、保育室	園長、保育士
	ドジョウ	1	2	継続	購入		事務室	保育士
	昆虫類	カブトムシ	10	1~130	継続、一時的	捕獲、購入、保護者から寄贈	有、無	保育室、廊下、事務室、倉庫
	クワガタ	5	1~7	一時的	捕獲、保護者から寄贈	無	保育室、廊下	園長、保育士、園児
	スズムシ	4	5~20	継続、一時的	保護者から寄贈、購入	有、無	保育室、事務室	園長、園児、保育士
	アゲハチョウ	1		一時的	種から育てたミカンに産卵		テラス	保育士
	セミ	1	2~3	一時的	捕獲	無		園児
	テントウムシ（幼虫）	1	10	一時的	捕獲	無	保育室	園児

	カマキリ	1		一時的	保護者から寄贈		保育室	保育士、園児
	アメンボ	1		一時的	捕獲		保育室	園児
甲殻類	ザリガニ	3	2~沢山	継続	保護者から寄贈		廊下、事務室	保育士
	ダンゴムシ	2	沢山	一時的	捕獲	有	保育室	園児
	エビ	1		継続	購入	無	保育室	保育士、園児
	カニ	1	3	継続	捕獲		保育室	保育士
	ヤドカリ	1	5	継続	保護者から寄贈		保育室	保育士
軟体動物	カタツムリ	3	2~5	継続	保護者から寄贈、捕獲	有	保育室	保育士、園児

哺乳類のウサギ（おそらくアナウサギ）、鳥類のニワトリ（チャボ、ウッコッケイを含む）、セキセイインコ（インコを含む）、アヒル、クジャク、ツバメ（一時的に園に営巣したもの）、爬虫類のミシシippアカミミガメ（カメを含む）、クサガメ、両生類のメキシコサラマンダー（ウーパールーパー、サンショウウオの仲間）、魚類のメダカ、熱帯魚（種別に明記されていない回答もあり「熱帯魚」としてまとめて取り扱った。）、金魚、ドジョウ、昆虫類のカブトムシ、クワガタ、スズムシ、アゲハチョウ、セミ、テントウムシ、カマキリ、アメンボ、甲殻類のザリガニ、ダンゴムシ、エビ、カニ、ヤドカリ、軟体動物のカタツムリが飼育されていた。飼育していた園数は、カブトムシが10園、ミシシippアカミミガメ、メダカがそれぞれ6園、熱帯魚、クワガタがそれぞれ5園、金魚、スズムシがそれぞれ4園であった。

飼育数は、カブトムシを除き、それほど多くなく、飼育数については飼育環境の悪化につながるような問題は特にないと思われた。

飼育のタイプとしては、経年的に継続して飼育するものと、季節的に飼育する一時的なものに分けられた。園舎の壁に毎年一時的に営巣するツバメを飼育動物に上げている園も2園あった。昆虫類の多くが一時的な飼育であるが、カブトムシとスズムシを繁殖させて継続的に飼育している園もあった。

飼育されている動物は、保護者から寄贈されたもの、保育士や園児が捕獲したもの、購入したもの等があった。一つの園では、ミカンを種から栽培し、その木にアゲハチョウが自然に産卵し、羽化するまで飼育している例があった。

繁殖については、ニワトリ、セキセイインコ、クジャクなどの鳥類、メダカ、カブトムシ、スズムシ、ダンゴムシに限られていた。

飼育場所は、哺乳類、鳥類は園庭が多く、他は保育室や廊下が多かった。

飼育担当者は、園長、保育士が多く、4歳児、5歳児が加わる事もあった。

飼育上の問題点として指摘があったのは、動物へのストレス、ツバメの糞の処理、カメにかまれる可能性、水温管理等の飼育技術、保育士や園児の飼育に対する関心の維持等が上げられている。カブトムシの卵や、カマキリの幼体の数が多いため、その取り扱いについても苦労しているようであった。

表2に、動物分類群ごとの飼育園の状況を示した。なんらかの動物を飼育していた園は、16園（84%）であり、昆虫を飼育していた園がもっとも多く、13園（68%）、ついで魚類9園（47%）、爬虫類と甲殻類がそれぞれ7園（37%）であった。平均では、2.58動物群、3.74種（最大10種）を飼育していた。

表2. 保育園ごとの飼育動物の種数と分類群数

園	哺乳類	鳥類	爬虫類	両生類	魚類	昆虫類	甲殻類	軟体動物		分類群数	種数
1	1	2	1		2	2	1			6	9
2	1	2	1			3	1			5	8
3	1			1	3	3				4	8
4		2				1	2			3	5
5		1	1							2	2
6		1			1	2				3	4
7		1			1					2	2
8			1		3	4	1	1		5	10
9			1		1	1	1	1		5	5
10			1		1	1				3	3
11			1							1	1
12					3	1	1			3	5
13					1	1				2	2
14						2	1			2	3
15						2				1	2
16						1		1		2	2
17										0	0
18										0	0
19										0	0
飼育園数	3	6	7	1	9	13	7	3	平均	2.58	3.74

4) 全国との比較

川添・大澤（2008）が、全国の2000園の幼稚園と保育園の飼育の状況についてアンケート調査を行った結果をまとめている。全国的に飼育している園が多かった動物(200園以上)は、ウサギ、インコ、カメ、オタマジャクシ、カエル、キンギョ、メダカ、カブトムシ、クワガタ、ダンゴムシ、アオムシ、ザリガニ、カタツムリであり、傾向としては大体同じであるが、オタマジャクシ及びカエルが本調査では飼育例が無かった。アゲハチョウの幼虫は、アオムシに含めて良いのかもしれないが、飼育を行っていたのは一園にすぎなかった。繁殖が行われた動物は、ウサギ、インコ、ニワトリ、メダカ、カエル、カブトムシ、ザリガニ、カタツムリ等でありほぼ同じ傾向であった。

5) 動物の飼育に影響を与える外的要因について

16の園からのアンケートによって得られた保育園の定員、敷地面積、園庭面積、延べ床面積は、それぞれ 140 ± 43 人、 $1458 \pm 122\text{m}^2$ 、 $646 \pm 56\text{m}^2$ 、 $945 \pm 71\text{m}^2$ であり、敷地面積/定員、園庭面積/定員、延べ床面積/定員は、それぞれ $10.7 \pm 0.7\text{m}^2/\text{人}$ 、 $4.77 \pm 0.37\text{m}^2/\text{人}$ 、 $7.40 \pm 1.03\text{m}^2/\text{人}$ であった（平均値±標準誤差）。

また、自然環境の指標として、各保育園からもっとも近い公園までの距離（公園距離）と各保育園から500m以内にある公園の数を、福岡市、春日市、大野城市、志免町から提供いただいた

都市公園の位置図より算出した。公園距離は、 74 ± 22 m、公園数は 8.1 ± 0.7 園であった。

公園距離、公園数、定員、敷地面積、園庭面積、延べ床面積、敷地面積／定員、園庭面積／定員、延べ床面積／定員 と、保育園で飼育していた種数、分類群数、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、軟体動物、甲殻類、昆虫類の各種数との相関を調べた。なお、カメとミシシippia カミミガメ、ニワトリ、チャボとウコッケイ、セキセイインコとインコは同一種として扱っている。また、熱帯魚、金魚もそれぞれ1種として扱っている。

ほとんどのものに有意な相関は見られなかったが、種数と敷地面積／定員には有意な相関が見られた ($r = -0.51717$, $p = 0.0402$)。また、甲殻類の種数と敷地面積／定員にも有意な相関が見られた ($r = -0.60467$, $p = 0.0131$)。いずれも負の相関であり、子どもあたりの敷地面積が小さくなるにつれて、飼育する動物の種数、甲殻類の種数が増えるということである。相対的に保育園が狭くなると、飼育動物を増やす事によって、環境の改善を図っていると考えられる。また、甲殻類にこのような強い相関があるのは、飼い易いからかもしれない。昆虫類や魚類を飼育している園が多いのは、昆虫類が子どもたちに人気がある事も一因ではあると思われるが、やはり飼育し易いということも一因であろう。

6) 動物飼育についての今後の課題

全国の園と比較して、博多区の園では、アオムシやカエルに関心が低いのが特徴である。博多区は、博多湾の港湾施設がある地域から、南方向の内陸部に向けて、中洲、キャナルシティ等の繁華街、オフィス街、住宅地があり、さらに東側には福岡空港がある。福岡市では、田が10.9%、畑が4.6%占めるのに対して、博多区では、それぞれ3.0%、1.9%であり、福岡市内でも田畑が少ない地域である(福岡市 2007)。ほとんどは、国勢調査でDID地区(Densely Inhabited District)とされる人口集中地区である。この事が、カエルやオタマジャクシ、アオムシの飼育がほとんど見られない原因の一つと考えられる。子ども達の生活環境にこれらの生物がないという事であれば、博多区の園では、意識的に、カエルやアオムシの飼育をする必要性が高いと考えられる。

今回の調査でアオムシを飼育していたのは、一園だけであったが、種からミカンを育て、そこにアゲハチョウが産卵して、園内で蛹から羽化をするまで子どもと観察するという、自然を園の中に意識的に取り込んで、産卵、孵化、幼虫の成長、蛹化、羽化まで蝶の生態をすべて観察するという素晴らしい保育がされていた。自然の少ない博多区ではこのような取り組みが多く園でなされる必要があると考えられる。

飼育担当者が多くの場合、保育士や園長であり、動物飼育を十分に教育に生かしていないとも言える。理由を検討して改善を図る必要があると思われる。

また、多くの保育園で水槽を利用して様々な動物を飼育しており、水槽を飼育の場としてとらえて、その有効で適切な活用を検討する必要があるかもしれない。

生き物を飼育するためには、継続的な努力が必要であり、保育園の休園日にどのように世話を

するかは大きな問題である。また、園児が飼育動物に対してアレルギーを示す可能性もあり、避けられる傾向もある。自然環境の悪化、都市化の進行のため、野生動物や飼育動物とふれあい経験の無い保育士も増えている。

しかし、近年は、動物の飼育を通じた教育、保育は、動物介在教育（AAE: Animal Assisted Education）として、動物介在療法（AAT: Animal Assisted Therapy）、動物介在活動（AAA: Animal Assisted Activity）とならんで注目されてきている（谷田・木場 2004）。動物飼育の教育的影響については、谷田他2002では、「心を育くむ」「想像力を豊かにする」「科学的な興味を引き出す」「生き物に親しませる」「飼ひ方、扱ひ方を学ぶ」「人間関係を深めるきっかけとなる」「死生観を伝える」が上げられており、「心・いのち・脳を育む」ものとして、特に、幼稚園、小学校での動物飼育について研究は進められている（全国学校飼育動物研究会2006）。保育園、幼稚園においても、「いのち」を子どもにどう伝えるかは大きな課題となっており、特に、1997年の神戸連続児童殺傷事件以降、強く意識されるようになった。食事は、「いのち」を頂くことであるということは、作物を栽培したり、生きたニワトリや魚などと触れ合うことによって子どもは感じ取る事が可能である。他の生き物を殺し、食べる事によって生かされているということを知る事は、自分や友達、ほかの生き物を大切にすることにつながって行く。動物飼育、作物栽培は、環境教育の面からも、人間が他の生物によって支えられているということを感じるためにも重要と考えられている。

動物の飼育は、環境倫理の広がりにより、人間中心主義からしだいに動物の福祉を配慮したものになりつつあり、本来の動物の生態に近い形での動物の飼育をおこなうという環境エンリッチメントの考えも必要とされて来ている。また、野生動物を一時的に捕獲して飼うような場合は、生態系への影響についての配慮も必要となつて来ている。たとえば、カブトムシを捕獲して飼育し、繁殖させた後、放すという場合は、捕獲した場所で放すのが原則であり、捕獲した場所と離れた場所で放す事は好ましくない。野生生物にはそこに歴史的に作られて来た遺伝子プールがあり、それをかく乱する事を避ける必要があるからである。この点では、動物を業者から購入した場合は、終生飼育し、野外に放すことが無いようにする必要がある。動物飼育は、自然と人間の関係が見直されつつある現在において、新たな知見、思想によって再検討が進められており、保育士、幼稚園教諭のリカレント教育、また養成課程においても、この変化を取り入れる必要があるだろう。

謝辞

このアンケート調査は、福岡市保育連盟福岡市市立保育士会の平成18年度、平成19年度博多区グループ研修の一環として行われたものであり、研修委員の黒瀬恵美子先生（光應寺保育園、現しかた保育園 園長）、荒木悠子先生（光薫寺保育園）をはじめとして、研修に参加された先生方には、調査の実施にあたり大変お世話になりました。また、福岡市、春日市、大野城市、志免町には、都市公園の分布の資料をご提供いただきました。皆様に感謝の意を表したいと思います。

引用文献

- 川添敏弘・大澤力. 2008. 幼児期環境教育の実践的取り組みに関するアンケート調査報告—「飼育」部分についての結果報告—, 東京家政大学研究紀要 48(1): 59-66.
- 全国学校飼育動物研究会 (編著). 2006. 学校・園での動物飼育の成果～心・いのち・脳を育む～, 緑書房 191pp.
- 谷田創・木場有紀 (編). 2004. 幼稚園における動物を通した教育のためのガイドブック, 広島大学動物介在教育研究会, 293pp.
- 谷田創・木場有紀・原田智江・松島英恵・望月悦子. 2001. 幼稚園における生き物とのかかわりを通した心を育む教育のためのガイドライン作成を目指して, 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要29: 213-220.
- 谷田創・木場有紀・金岡美幸・原田智江・池田明子・松島英恵・望月悦子. 2002. 幼稚園における生き物とのかかわりを通した心を育む教育のためのガイドライン作成を目指してII, 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要30: 281-288.
- 鳩貝太郎・中川美穂子 (編). 2003. 学校飼育動物と生命尊重の指導 (教職研修総合特集 No.157), 教育開発研究所, 239pp.
- 福岡市. 2006. 福岡市統計書 (平成18年2006年) 版。

(ささき ひろし: 幼児教育科 教授)

(すえよし くみ: 光薫寺保育園 主任保育士)